

# 藤田文枝短歌集

*Fujita Fumie*

## 八十路過ぎて思うこと



藤田文枝短歌集

八十路過ぎて思ふこと

# 八十路過ぎて思うこと

藤田文枝



華道山村御流教授藤田松雲齋

八十路過ぎて思うこと 目次

親しき友とわかれて

思わぬ病となりて

造幣局の春

夫に先立たれて

ようよう我にかえりて

墓参り

娘婿逝く

タイムスリップ

戦争

あとがき

繪  
藤田安臣

親しき友とわかれて

昭和五九年頃



年老いて娘とともに住むという友のやさしきおわかれの声

いつの日がおわかれの日のあるという友の言葉に胸いたみくる

とほとほと同じよわい齢いの人がある我らもがなとわびしくなりぬ

思わぬ病となりて

平成五年頃

人の事にせざくらせと息子たち一生懸命いゝきかせくれ

たくましき心もちてあゆみゆく娘の心我にあたえて

病みて後はじめて筆をとりてみれば書けぬ字多く頭のいたむ

つぐいすの初音をきくて降る雨につつの病を一人いやしむ



# 造幣局の春

平成五年頃



老夫婦桜の道を通りぬけ心あたゝまる一日ひとつとなりぬ

思い出のとおりぬけも二度目なればおだやかにすすいすすい進み歩めり

あれこれと病持ちつゝ、打ち勝ちて弱音をはかぬ夫をつやまう

雨風に桜はもはや散りたるも一人で歩むとおりぬけの道



夫に先立たれて

平成六年頃

一心につくしてくる吾子たちにたゞ幸せをかみしめている

何事も忙しくあればあれこれと思ついとまもなきが幸せ

よろこびもかなしみもみなのみこんであとしばらくをたのしく生きん

うつし世と別れし夫いまだなおありしがごとくかたりすごしぬ

かくばかりやせさらばえて亡き夫をみとりしあとのしあわせおもつ

何事も二人三脚で過ごし日々たのしく生きしありし日しのぶ

うつし世にわかれしことのかなしさもあの世でも又会いそいとげむ

うつし世の最後の最後まで手をにぎりたびたつ前にさしずして逝く

いさましき夫のさいごをみとゞけて悔いなし我のこの世での旅



二人ともやせさらばえて得た夢はさいごのみとり我に悔いなし

夙川のつつみにさくらほころびて夫と歩みし去年がなつかしこそ

我が心なぐさめんとて忙しき息子はわれの手をとりてゆく

夫逝けど子等に甘えてあとしばしなしたきことをたのしみにして

きんもくせい香をかげば亡き父の病みたる姿思い出しけり

八十路すぎいまだながらく生きのびて亡き父しのぶもくせいの香り

老いし身を案じてつねに声かける子らもそれぞれとし重ねあり

人々のだれよりもめぐまれし我なればこの世の淋しさよろこびにかえん



震災のあと片付かぬまゝ二とせの日は近づきて変わりし我は

夫逝きて一周忌近くなりぬれどしんさいのあと片付かぬまゝ

去る者は日にうつとしいうなれど一日たりとも思わぬ日のなく

てりりかてりりてりりてりり

平成九年

年あけて一周忌終わり次々になしたきことのとゞこおりがち

あやめかきつ葉のふくらみて春らしく土もりあがることなりけり

思いたちかるがる来たる山陰の米子の町も高速で走る



ウエイトをおくべきところきめかねる速き変化においつけぬ老



墓参り

平成九年

おだやかな春の一日を暮まいりあたりの景色こよなくつるわし

来てみればさくらの盛りお墓にもひらひらまいちるやすらかな春

うぐいすの初音もきこえ亡き夫もさくらの園でやすらぎて居り

命みつめ精一杯に生きんとてはやる煩惱うちけしてゆく

おだやかにこの世の命おわらんと一日一日をたいせつにして

親おもう子等の心をつけとめてなきあとまでも有難さ思はん

娘婿逝く

平成九年八月四日



誕生日祝いしばかりの三日後に逝くとは知らず老いのかなしさ

大あれの原爆の日にもご殿の告別式をおこなうてあり

若葉かおる八月に生れ同じ月六十五才でもご殿は逝く

なす事をつらさの中に云いのこしおだやかに逝きしむこの尊さ

夫、婿と同じ猪名川の土にまつられて仲よく我等まちてありたし

ほどほどに完全主義はやめなされと亡き婿殿に常にいわれし

タイムスリップ

平成九年十月十一日

我れ生れそだちし安芸の厳島世界の遺産となるぞうれしき

八十路すぎ生まれ育ちし厳島今おとずれてあふれる涙

かわりたるところも多き宮島のかわらぬ道を急ぎ歩けり

常ならば歩けぬ道をなつかしさにいたさも忘れひたあるく我



戦争



昭和十年頃

つわものよあめふるよわまいねずしていびくののべをすくみたもうち

(昔、中国新聞に入賞して載った歌)



著者の学生時代

あとがき

八十年、思えばやっぱり長い年月でした。

又そんなに長かったとも感じないのが不思議です。

余りにもうつり変りのはげしい毎日ですのでこの先

どんな世の中になるのかおそろしい様な、又わくわくする様な複雑な気持ちです。

私等夫婦も全くちがった育ち方をして、性格も正反対でしたが次第に相寄りたのしい人生でした。

あとしばらくのこの世の旅ですが出来るだけ子等や

孫達の好意にあまえてたのしくおわりたいと願っています。



墓参り(1997年)



九州の旅（1981年）

著者略歴

藤田文枝（ふじたふみえ）

大正四年七月四日、広島県鞆島町で生まれる。  
島の小学校から広島県立第一女学校を経て  
広島女子専門学校国文科卒業。  
趣味

茶道、華道、謡曲、短歌、俳句、俳画  
習字、盆景。

現在は奈良円照寺山村御流の生け花が  
一番のたのしみ。

藤田文枝短歌集

著者 藤田文枝

編者 藤田純子

発行 クリエイト工房 藤

〒662 0076  
西宮市松生町二十九

装丁印刷 吉宗印刷所

〒650 0022  
神戸市中央区本町通五  
三  
一



藤田文枝短歌集

八十路過ぎて思うこと



クリエイト工房 藤